

# 三好さん、 ケアマネのおかれた状況を どう思いますか？

インタビュアー：本間清文

「介護支援所ファイト」代表・ケアマネジャー

**本間清文**：介護保険制度とともにケアマネが誕生して約10年です。今の状況を三好さんはどのように見えていますか？

**三好春樹**：僕は介護保険制度に賛成でも反対でもなくて、必然的にそうなるんだろうなという見方をしていました。市場原理が導入されてよくなる面もあるだろうけど、だめになる面もあるだろうという見方でした。最近になって、市場原理そのものに矛盾があるということが社会全体でわかってきた感じですが、当時は市場原理はいいものだと思われていました。

だけど、福祉の世界は市場原理だけでいける世界ではないのです。市場原理だけでいくのなら“ケアマネ35人限定”なんてする必要はないわけですからね。いいプランをたててお客さんがたくさん来て儲かるというのが市場原理なのですから、非常に中途半端な市場原理です。市場原理が介護の世界に入ってきて矛盾が出てきているというのが現状だと思います。

## 介護に第三者はいらない

**本間**：三好さんは本で「(評価は)お年寄りの笑顔だ」と書かれていますが、ケアマネとして仕事をしていると、必ずしも笑顔だけとは言えないと感ずることがあります。介護保険になって、保険料を払っているのだから使うのが当たり前だろうという感じで、ヘルパーを家政婦のように使う人もいます。その笑顔は「消費者としての」の極めて利己的な笑顔のように僕には感じられます。その笑顔と三好さんが言っている笑顔



(介護保険以前の福祉としてあった笑顔)はまったく別物だと思うのですが、それが今は同列で語られ、その評価をジャッジするところもない。それをいいことに、資本力をもつ大きな会社などが介護をディズニーランドやホテルマンのようなサービスと同列のサービス業というイメージをコマーシャルなどによりばらまいています。その結果、本来の福祉的な、自立支援的な支援やよい介護をしている小さい事業所がまっとうな評価を得られず、駆逐されてしまっている現状もあります。

**三好**：僕はひとつのアンチテーゼとして〈笑顔〉を提出したのです。笑顔の評価なんて誰にもできない。客観性などどこにもないわけだから。

家族の即時的な要求に全部応えるのがいい介護だというのは、介護の側が主体性を失っているということでもあるし、消費者の側が本当のニーズをわかっていないことでもあるのでしょうか。いい仕事とは何か。それは消費者が満足することだと市場原理は言うのですが、ここで言う消費者は当事者の老人ではなくて、家族なんです。老人は消費者として大事にされたってうれしくなんかいいですよ。お客様と呼ばれて、「してほしいことはないですか」なんて聞かれるような関わりは望んでないと思いますね。

市場原理では〈消費者は神様です〉ということになるのだけど、介護は違う。介護は老人も主人公だけど、介護者も主人公で、いかにしてお互いの満足度のつりあいをとるかという世界だと、僕は思っています。第三者評価なんてものがありますが、僕は第三者はいらないと思いますね。第一者と二者である当事者同士が満足するのが大事なことなんです。

してあげたいケアがあることが専門家だと思いますし、老人にもしてほしいことがあって、それがクロスして矛盾もありながら、なんとかそこで成り立つというのが、介護だろうと僕は思っています。ただ、最終的にそんなケアがどこで成り立つのかというと、もう奇跡みたいなところでしか成り立たないような気はしていますけどね。

**本間**：僕は、最初事業所のキャッチコピーを「利用者本位」としていたんですが、やめました。サービス業的にとられてしまうから。僕は利用者に対して冷たいことをやったり、言ったりもするので(笑)、いわゆる「利用者本位」とはちょっと違うかなと思ったのです。

**三好**：仙台にある「いずみの杜診療所」の最初のキャッチコピーは「利用者主体の自立支援」だったのですが、途中でやめました。利用者主体というと、介護職が自己犠牲で何でもやってあげてしまう。自己犠牲でやっていても老人は喜ばない。介護職が楽しいと思うことをやれと。それで「介護道楽・ケア三昧」になったんですが、本当にそうだと思います

本間…ケアマネの評価軸がほしいんです。  
三好…客観性などどこにもないのです。介護はそれほど  
近代的な制度にはなじまない世界なのです。





すよ。どちらも奴隷になってはいけません。「利用者主体」は美しい言葉だけど、介護職が奴隷になってはしょうがないです。

**本間**：でも、奴隷と化している人は多いですよ。

**三好**：仕事だから仕方がない面はあるでしょう。だけど、プライドを失ってまでやってはいけないね。合理的にやれる用件は合理的にぱつとやってしまえばいいんですよ。

客の9割がお客様として大事にされることを喜んでいるのなら、それはそれでやってしまおう。やりがいはないかもしれないけれど、まあ世の中の仕事は大体そんなものでしょう。残りの1割が、自分が関わることでもしかしたら、その人の人生が変わるかもしれないというケース、

その1割のために9割は飯の種として適当にこなそう。この1割はまったく採算がとれないかもしれないけど、年に4ケースぐらいあって2人ぐらいの人生が変わったら、トータルで見ればいい人生じゃないか、いい仕事をしたと言えるのではないかと思うんです。

**本間**：今の言葉を聞いてすごく気持ちがらくになりました（笑）。自分が福祉的なものを求めすぎていたのかもしれない。

## ケアプランを変えたら 徘徊が消えた！

**本間**：最近、すごくうれしいことがありました。ケアプランを変えることで徘徊がなくなったおばあちゃんを経験したんです。

そのおばあちゃんはひとり暮らしで、まだらの認知症があるのですが、とても素直な性格で、点検詐欺に何度もだまされるんです。そのたびに近くに住む家族がクーリングオフをしていました。家族はおばあちゃんをひとりでおいておくのが心配なので、ショートやデイをたくさん使って、自宅にいる時間を減らそうとしていました。僕は家族の希望を受けて、デイやショートを組んでいたのですが、最初の頃にはなかった徘徊が始まり、自宅がわからなくなるようになりました。まずいなあと考えた僕は、まず家族に別の医師を紹介し、薬を変えてもらいました。そして、デイなどで外に出ると、もっと自分の家がわからなくなると思ったので、できるだけ家で生活し



**profile** 本間清文 (ほんまきよふみ)

「介護支援所ファイト」代表・介護福祉士・ケアマネジャー。中野区介護支援専門員部会副会長。40歳。兵庫県出身。神戸新聞社、フリーターを経て、特養ホーム、デイサービス、社会福祉協議会などを経験しケアマネジャーに。公正中立なソーシャルワークを求め、2005年東京都中野区に単独事業所を設立。趣味は読書とマラソン。著書に『教科書が教えてくれないケアマネ業務』（雲母書房）。ホームページ「ファイトほんまの介護支援!」。「独立ケアマネ・ネットワーク」世話人。

【連絡先】東京都中野区新井 2-39-11-101  
TEL 03-5345-9481 FAX 03-5345-9486  
Mail fight\_001@mail.goo.ne.jp  
<http://www.geocities.jp/fight001honma/>



てもらおうプランに変えました。食事は配食だったのですが、ヘルパーさんとお店に買い物に行って、いっしょにつくるようにしました。積極的に家で生活するケアプランにし、入所・通所主体から訪問主体に変えたのです。しばらくすると、徘徊がなくなったのです。やったあ！ と思いましたね。

自宅にいる時もヘルパーは見守りに徹して、掃除や洗濯など、おばあちゃんにやってもらおうようにしました。その人はとても素直なので、このプランを受け入れてくれたのだと思います。すごくうれしかったんですけど、誰にも評価されないんですよ（笑）。

僕はケアマネとして独立して3年になるのですが、この間の収入を考えると、どう考えても働きに見合った額とはいえません。最初に話した評価基準が笑顔の論と同様に、ケアマネの評価がきちんとされていないことが大きな原因ではないかと思うのです。介護度が重くなるほど報酬は高く、なおかつ35人しか受けもてないという上限はありますが、プランやソーシャルワークに対する評価は何もないのです。何がいい介護なのか、何がいい介護の調整なのか、評価法がまったくなくて、結果的に介護度によって報酬は決まってしまうのです。

**三好**：数字に変化があらわれるわけではないから、完全に自己満足の世界なんだけど、この自己満足を現場でいかに共有するかをつくっていくほかないと僕は思います。それが「ブリコラージュ」という雑誌のつもりなんです。たぶん、そういう救いしかないんですよ。制度的なものに救いを求めようとしてもたぶんだめですよ。





本間：世の中は何でそんなことに気づかないんだろうと、僕は憤ってばかりです（笑）。

三好：今、いい介護をやるうと思う人は世の中の価値観からずれないとしようがないです。

本間：そうかあ…、ちょっとさみしいですね。

三好：本間さんはどうして独立ケアマネになったのですか？

本間：僕は訪問介護事業所時代に、営利誘導を強要された経験があります。制度自体がおかしいという気がしているので、独立ケアマネは〈アンチ〉介護保険のつもりでやっているんです。いつまでもつかわらないですけど（笑）

三好：やせ我慢は大事ですよ。

## ケアマネがやるべきことは？

本間：ケアマネは直接援助ではないから、制度の番人のような感じになってしまっています。それがおもしろくもないから、やめてしまうという人も多いようです。

三好：制度の中の支援で暮らしていけないケースに出合った時に、いかに例外をつくっていくかということじゃないかな。たとえば、ターミナル。ターミナルになると、もう介護保険だけでは支えきれない。その時に家族は何をするのかという話も含めて、家族に話ができるのがケアマネという立場です。

介護は専門家がするものと、いつの間にかみんな思い込んでしまっ、死だけでなく、死に至る介護まで専門家に任せる構造になってしまっていますが、それをもう1回家族や、地域に戻していくということを本当はケアマネはやらなければいけないだと思いますよ。「ケアプラン」と言うのなら。

本間：決定権は家族にありますからね。倫理とか、そういうところのせめぎ合いみたいな感じです。

三好：「もう大変だからあの病院に入れる」と家族が言う。病院に入れたらだめになるのがわかっている時に、「家族が決めることだから」というのは形式論だよね。僕たちは「ちょっとあそこは……」とやっぱり言うべきだと思う。

病院に入れたいというのも本音だけど、家でみたいというのも本音なのです。具体的な方法で誰も助けてくれないとか、共感してくれない。だから、家ではみれないという人もいっぱいいると思う。こちらの関わり方一つで本音なんか変わるんです。“消費者主体”なんて言ってるから、老人ホームに入れておしまい！ となるんです。

本間：世の中の風潮は医療プランのほうが難しいというのですが、僕は違うと思っています。医療はエビデンスがあって、ケアプランのレー



ルができています。知識さえあれば、さほど難しいことではありません。ただ、介護はエビデンスなどない世界だから、介護プランのほうが難しいはずなんです。

**三好**：医療は人体に対するものだし、介護は人生に対するものだから、介護のほうが難しいに決まってるよね。

**本間**：でも、世の中はそうじゃないから、何でそんなことに気づかないんだろうと、僕は憤ってばかりです（笑）。

## 生活という共同基盤を見る想像力

**三好**：NHKスペシャル「闘うリハビリ」という番組に、左片マヒの写真家の男性が登場していました。彼は昆虫写真家だったのですが、片マヒになってからは動くものは難しいから花の写真家になりました。彼は「私はこの手が治る、治らないはどうでもいいんだ、自分のしたいことができるかどうかだ」とはっきり言い切っていました。リハビリは闘うものではなくて、自分らしく生きるということ。介護はそこなんです。いかにその人らしく生きるかということとどう援助するかということなのです。だけど、世の中には最後まで自立していなければいけないという強迫観念が充ち満ちていて、世の中の許容度がどんどん失われている。正しいとか正しくないとか、ほけたらそんな規範ははずれてしまうんだから。年とれば自立なんかできないんです。そういう時代である今、いい介護をやると思う人は世の中の価値観からずれないとしょうがないです。

**本間**：介護の問題がこじれている原因の一つとして、当事者である高齢者に主体性がないために中心性が欠けているということがあると思います。現場の話でいうと、チームケアとかいって、会議をやるのですが、専門家と家族で、ああだこうだと話すのだけど、当事者であるお年寄りにはぼーっと寝ていたり、ぼけていたりするわけです。結局、当事者不在で、ヒエラルキーの中で答えが出てしまったり、性格の偏った家族の意向だけで決まったりするのです……。

**三好**：必要なのは、きっと想像力なのでしょう。抽象的な想像力ではなくて、生活という共同基盤を見る想像力です。

センター方式のように「私の生活習慣を大事にしてください」と言えば済むということではないのです。じゃあ、その生活習慣って何だ？という、僕たちはもっと具体的です。食事、排泄、入浴をいかにその人が70年、80年やってきたのと同じようにやるかという視点をまず押



さえるべきなのです。生活習慣がたばこを吸うとか、趣味的なものに矮小化されてしまっている。

ほげが深くなって生活どころではなくなってくると、人間であるとか、生き物として、快・不快の原則で生きていくというところまで還った時にどうなんだという、その人のいるレベルに応じたアプローチの仕方、評価の仕方、想像力の働かせ方をどれだけもっているかということが逆に問われているのでしょう。

## ブリコ的な人々が生き残るヒント

**本間：**僕は在宅介護支援センター（在介）的なことをやりたいのです。在介はケアマネの原型ですが、ケアマネよりももっと自由に地域のソーシャルワーカーみたいな感じだったでしょう。あまりお金にはつながらないけど。

「ファイト」は1人だけの法人なので、誰も僕を警戒しない。僕の場合、極力、自己開示に努めて、自分の思いや考え、仕事ぶりをオープンにしてるんです。そのうえ、ノラ犬のようにあちこちに出没します。そのせいか、多くの他事業所の人たちが仕事上の愚痴や相談、人生の悩みも何でも言うてくるんです。そんな人の網の目をうろうろしているのがおもしろいと思っています。そういう意味で仕事以外のネットワークもつくっていきたいと思っています。三好さんはどうやって仲間を増やしていかれたんですか。

**三好：**僕は飯が食えなければ病院でPTのアルバイトをすればいいやと思って、東京と広島で「生活リハビリ講座」を始めたのですが、予想外に人が集まって、そのうちこの「ブリコラージュ」を出すことになりました。東京に知り合いはいなかったけど、やっぱり東京だろうという思いで出てきて「(自分は)これをやりま〜す！」と手を挙げると、じゃあ手伝ってやろうというヤツがどんどん集まってきた。簡井書房の社長が事務所を借りてくれたり、こんな表紙じゃ売れないからとデザイナーの石原雅彦さんを紹介してくれたり……、「やりたい!」「おれはこれができます」と言うと、それが通じる世界。東京は不思議なところだなと感じます。

ただ、僕は雇ったり、雇われたりという長く続く人間関係が苦手なんです。だから基本的にはずっと1人ですね。

**本間：**以前は僕も、ずっと組織でやってきたのですが、今は1人で切り盛りしています。今は1人で自由に動き回っていますが、仲間が増

本間…三好さん、どうやってこんな熱い仲間を増やしてくることができたんですか？

三好…それが不思議なんだよね。



えたらどうなんだろう? と考えたりもして、今後どういう方向に行けばいいのかわからなくなる時もあります。

**三好**: そういうのを応援するのがブリコラージュの役割なので、呼びかけるといいですよ。今後も独立ケアマネでいきたいと思っているんですか?

**本間**: というか、今ケアマネをやめてもろくなものにはならないんで(笑)。この仕事自体がまだできて10年なので、もうちょっと固まってくるまでやっていないと、まともなケアマネになれないという気持ちがあるんです。でも独立ケアマネだけでは雀の涙の報酬ですし……まだ、しばらく悩むと思います。

小さい事業所やよい介護、よいケアマネジメントがむくわれるような、「なんらかの評価」の指針のようなものを僕はつくりたいのです。

ブリコ読者のほとんどは、そういう小さいところでコツコツ真面目にされている方々だと思います。そういった方々が、評価基準のない市場ジャングルで駆逐されそうになっている今、ブリコ的な人々が生き残る術のヒントを教えていただきたいのです

**三好**: みんな皮相なところで選ぶんですよ。権威があるとか、金がかかっているとか、テレビに出たとか。親の介護を任せることに躊躇とか後ろめたさがあるから、余計にそんなものに頼ろうとするんです。こっちは何の意味もないことは知っているのだけど、みんな幻想を求めているのだから本当のことは伝わらないよね。少数のわかっている人は別だけど。

で、幻想に対抗するには幻想しかないとき直るんです。「ちゃんと真面目にコツコツやっています」が通じればいいのだけど、そうはいかないから別の幻想をもってくるのです。たとえば、僕なんか学歴も大学教授なんていう権威もないけど、逆に高校中退で介護現場30余年を売り物にするのです(笑)。よりましな幻想に移ってもらおうのです。

だから、僕たちは「医療」に対して「生活」を持ち出すのです。でもその「生活」もすぐに近代的幻想にされちゃって「全室個室」なんて幻想に墮落するのですが、そうするとまた次のコトバを提出していくのです。

僕が本を出し、テレビに出るのもそう。よりましな幻想になるためです。もっともそれによって墮落する可能性があることは承知していなければなりませんけどね……。

なんだか純粋な青年に大人が悪知恵を授けてるみたいな話になってきたね(笑)。





# ボタンをかけ違えたまま 走る介護保険の中で 今、僕たちにできること

特集監修者 本間清文

ここだけの話、三好さんは介護保険制度下でのケアマネジメントのことは何も知らないだろうと思っていた。

だから、まず、今回の企画の前には、事前に自分から三好さんに介護保険制度下におけるケアマネの仕事とは何か、という説明をする必要があるかなと考えていた。三好さんが介護の現場にいらしたのは介護保険よりはるか以前のことであり、到底、現在とは介護サービスなどの状況も違う。以前の話をも、そのまま今、話されても現場の読者であるケアマネたちに届かないだろうと思っていた。

## もっとスムーズだった 措置時代の関係調整

しかし、その後、ふと思った。「介護保険が始まる前から、介護サービスそのものはあったけど、ケアマネなどという仕事はなかった。その頃、介護サービスはどのように調整され、利用者はどのように介護サービスと関係していたのだろう。ケアマネがいなかった頃、そこらへんの介護サービス調整とか人間関係の調整はどうなっていたんだろう」と。

早速、三好さんの書籍の中から「それらしきことが書いてある本はないか」と探し始め、『関係障害論』に出合った。

僕はフリーの立場のケアマネなので、ふだん、ノラ犬のようにあちこちを徘徊している。あちこちの事業所に顔を出し、あちこちの現場に駆けつける。いろいろな人と仕事をし、いろいろな人と関係している。「関係」や「ネットワーク」を駆使することが僕の仕事と言ってもいいくらいだ。そんな僕の目に飛び込んできた「関係障害論」というタイトル。「これだ」とピンときた。数行読み進めるうちに、その読みが外れていなかったことを悟った。

そこには、ケアマネジメントなどという言葉もなかった頃に自然と行われていたケアマネジメント論が書かれていた。介護保険制度の下で、僕が見失いかけていた真の意味での関係調整の話が書かれていた。なんのことはない。ケアマネなんぞが誕生する前は、介護サービスや介護職の人たちがケアマネジメントや関係調整をしていたのだ。行政や保健師との連携が必要であれば、直接、そこへ電話し高齢者やその生活、家族について話し合う。ケアマネなどいないほうが、よほどケアチームや関係者の関係調整がうまく行われていたストーリーが散りばめられていた。

## ケアマネなんてなくしちゃえ!?

ふだんの仕事の中で、介護サービスに対して、

こんなことを感じることもある。「おいおい、それくらいの家族との交渉はケアマネを通してでなく、そっちで直接、やってくれよ」と。ケアマネが間に入れば、ますます話がややこしくなりそうなことにまでケアマネの介入を求めてくる事業所がなかにはあるのだ。

もしかしたら、ケアマネなんてものが誕生したから、本来、介護サービスや介護職がもっていたケアマネジメント能力を破壊してしまったのかもしれない。介護は介護職に任せて、関係調整はケアマネに任せる、なんていうふうに分業化してしまったから、ますます、仕事がつまらなくなっているのかもしれない。

もちろん、すべてのサービス事業所がケアマネジメント機能を失ったとは思っていない。「井戸端げんき」(千葉県)などは、昔ながらのケアマネジメント機能を有した介護サービスとして運営されているし、僕の周囲にも、そういうお節好きで、人間大好きなサービス事業所も少なくはない。ブリコの読者や、この特集に登場したケアマネもそうだと思う。しかし、多くはない。

一方で、仲間のケアマネの仕事の悩みを聞けばこんなことを言ってくる。「ケアプランに自社サービスを組み込むノルマが最近、きついです」と。そんなことが介護保険以前に起こりえたのだろうか。ニーズもないのにサービスを押し売りのように関係調整者みずからが手配するようなことがかつての措置時代に起こりえたのだろうか。

今回の特集を読み返して感じるのは、僕の原稿も含め、多くの方の原稿に現状の介護保険やケアマネ業務に対する批判的論調が目立つことだ。ここに今の介護保険やケアマネをめぐる状況が端的に現れていると思う。

そんなことを考える時、僕は「ケアマネなん

## 教科書が教えてくれない ケアマネ業務

著者：本間清文  
発行：雲母書房  
体裁：A 5判・並製・220頁  
定価：1,800円＋税



※ご注文は BBC へ 0120-861-863

て、なくしてしまえばいい」と思わざるをえなくなる。いや、ケアマネに限らず、この介護保険制度そのものが、最初のボタンを掛け違えたまま走っているから、どんどん、ほころびが大きくなっていくように感じている。介護施設、在宅介護サービス、すべてがそうだ。僕は、この介護保険制度そのものに懐疑的だ。

## 新しい幻想を模索しながら 歩きだそう

そんな大きな問題の前で、僕は立ちつくしていた。問題の輪郭さえも見えず呆然としていた。今回の三好さんへのインタビューでは、そんな自分の疑問をストレートに投げてみた。即座に剛速球、ど真ん中、ストライクの返事が返ってきた。それがインタビュー中にあった「幻想には幻想を」という<sup>くだり</sup>件だ。「正論が必ずしも正しいとは限らない」という世の真理を論じていただいたように感じた。

これは、問題解決のための大いなるヒントだった。大いなるアイテムをいただいた。そのアイテムを僕はこれから、もっと自分仕様にチューニングし、新しい「幻想」の形を模索していこうと思っている。